

# 性急な思想

石川啄木

青空文庫



最近数年間の文壇及び思想界の動乱は、それにたずさわった多くの人々の心を、著るしく性<sup>せつ</sup>急<sup>かち</sup>にした。意地の悪い言い方をすれば、今日新聞や雑誌の上でよく見受ける「近代的」という言葉の意味は、「性<sup>せつ</sup>急<sup>かち</sup>なる」という事に過ぎないとも言える。同じ見方から、「我々近代人は」というのを「我々性<sup>せつ</sup>急<sup>かち</sup>な者共は」と解した方がその人の言わんとするところの内容を比較的正確にかつ容易に享<sup>うけい</sup>入れ得る場合が少くない。

人は、自分が従来服従し来<sup>きた</sup>ったところのものに対して或る反抗

を起さねばならぬような境地（と私は言いたい。理窟は凡て後から生れる者である）に立到り、そしてその反抗を起した場合に、その反抗が自分の反省（実際的には生活の改善）の第一歩であるという事を忘れてゐる事が、往々にして有るものである。言い古した言い方に従えば、建設の為の破壊であるという事を忘れて、破壊の為に破壊している事があるものである。戦争をしている国民が、より多く自国の国力に適合する平和の為という目的を没却して、戦争その物に熱中する態度も、その一つである。そういう心持は、自分自身のその現在に全く没頭しているのであるから、世の中にこれ位性急せつかちな（同時に、石鹼玉しゃぼんだまのように張りつめた、そして、いきり立った老人の姿勢のように隙だらけな）心持はな

い。……そういう心持が、善いとも、又、悪いとも言うのではない。が、そういう心持になった際に、当然気が付かなければならないところの、今日の仕事は明日の仕事の土台であるという事——従来の定説じょうせつなり習慣なりに対する反抗は取りも直さず新しい定説、新らしい習慣を作るが為であるという事に気が付くところが、一日遅ければ一日だけの損だというのである。そしてその損は一人の人間に取っても、一つの時代に取っても、又それが一つの国民である際でも、決して小さい損ではないと言うのである。妻を有ちながら、他の女に通ぜねばならなくなったあるい、或はそういう事を考えねばならなくなった男があるとする。そして、有妻の男子が他の女と通ずる事を罪悪とし、背倫はいりんの行為とし、唾棄だき

すべき事として 秋<sup>しゅう</sup> 毫<sup>こう</sup> 寛<sup>くわん</sup>すなき従来の道徳を、無理であり、苛<sup>か</sup>酷<sup>こく</sup>であり、自然に背<sup>そむ</sup>くものと感じ、本来男女の關係は全く自由なものであるという原始的な事實に論拠して、従来の道徳に何<sup>どこ</sup>処<sup>こ</sup>までも服従すべき理由としては無いのだと考えたとする。其<sup>そこ</sup>処<sup>こ</sup>までは可<sup>い</sup>い。もしもその際、問題の目的が「然<sup>しか</sup>らば男女關係の上に設<sup>お</sup>くべき、無理でなく、苛酷でなく、自然に背<sup>そむ</sup>くものでないところの制約はどんなものであらねばならぬか」という事であることを忘れてしま<sup>しま</sup>つて、既に従来の道徳は必然服従せねばならぬものでない以上、<sup>すべ</sup>凡<sup>すべ</sup>ての夫が妻ならぬ女に通じ、凡<sup>すべ</sup>ての妻が夫ならぬ男に通じてても可<sup>い</sup>いものとし、乃<sup>ない</sup>至<sup>し</sup>は、そうしない夫と妻とを自覚のない状態にあるものとして慙<sup>あわ</sup>れむに至<sup>いた</sup>つては、性<sup>せつ</sup>急<sup>かち</sup>もまた甚<sup>はな</sup>だしいと言わ

ねばならぬ。その結果は、<sup>ただ</sup>啻に道德上の破産であるのみならず、凡ての男女関係に対する自分自身の安心というものを全く失つて了わねば止ま<sup>や</sup>ない、<sup>すなわ</sup>乃ち、自己その物の破産である。問題が親子<sup>おなじ</sup>の関係である際も同である。

## 二

右の例は、一部の人々ならば「近代的」という事に縁が遠いと言われるかも知れぬ。そんなら、この処に一人の男（<sup>たとえ</sup>仮令ば詩を作る事を仕事にしている）があつて、自分の神経作用が従来の人々よりも一層鋭敏になつている事に気が付き、そして又、それが

近代の人間の一つの特質である事を知り、自分もそれらの人々と共に近代文明に醸かもされたところの不健康（には違いない）な状態にあるものだと思つたとする。それまでは可い。もしもその際に、近代人の資格は神経の鋭敏という事であると速そくりよう了して、あたかも入学試験の及第者が喜び勇んで及第者の群に投ずるような氣持で、（その実落第者でありながら。——及第者も落第者も共に受験者である如く、神経組織の健全な人間も不健全な人間も共に近代の人間には違いない）その不健全を恃たのみ、かつ誇り、更に、その不健全な状態を昂こうしん進すべき色々な手段を採つて得意になるとしたら、どうであろう。その結果は言うまでもない。もし又、そうしなければ所謂いわゆる「新らしい詩」「新らしい文学」は生れぬ

ものとすれば、そういう詩、そういう文学は、我々——少くとも私のように、健康と長寿とを欲し、自己及自己の生活（人間及人間の生活）を出来るだけ改善しようとしている者にとつては、無<sup>む</sup>暗<sup>やみ</sup>に強烈な酒、路上でも交接を遂げたような顔をしている女、などと共に、全然不必要なものでなければならぬ。時代の弱点を共有しているという事は、如何なる場合の如何なる意味に於ても、かつ如何なる人にとつても決して名誉ではない。

性<sup>せつ</sup>急<sup>かち</sup>な心！ その性急な心は、或は特に日本人に於て著るしい性癖の一つではあるまいか、と私は考える事もある。古い事を言えば、あの武士道というものも、古来の迷信家の苦行と共に世界中で最も性急な道德であるとも言え言える。……日本はその

国家組織の根底の堅く、かつ深い点に於て、何れの国にも優つて  
いる国である。従つて、もしも此処ここに真に国家と個人との關係に  
就いて真面目しんめんぼくに疑惑を懐いた人があるとするならば、その人の  
疑惑乃至反抗ないしは、同じ疑惑を懐いた何れの国の人よりも深く、強  
く、痛切でなければならぬ筈はずである。そして、輓近ばんきん一部の日本  
人によつて起されたところの自然主義の運動なるものは、旧道德、  
旧思想、旧習慣のすべてに對して反抗を試みたと全く同じ理由に  
於て、この国家という既定の権力に對しても、その懷疑の鋒ほこさき尖  
を向けねばならぬ性質のものであつた。然し我々は、何をその人  
達から聞き得たであろう。其処そこにもまた、呪のろうべく慙あわれむべき性  
急な心が頭を擡もたげて、深く、強く、痛切なるべき考察を回避し、



## 三

性急な心は、目的を失った心である。この山の頂きからあの山の頂きに行かんとして、当然経ねばならぬところの路を踏まずに、一足飛びに、足を地から離れた心である。危い事この上もない。目的を失った心は、その人の生活の意義を破産せしめるものである。人生の問題を考察するという人にして、もしも自分自身の生活の内容を成しているところの実際上の諸問題を軽蔑し、自己その物を軽蔑するものでなければならぬ。自己を軽蔑する人、地から足を離している人が、人生について考えるというそれ自体が既に矛盾であり、滑稽こっけいであり、かつ悲惨である。我々は何をそう

いう人々から聞き得るであろうか。安価なる告白とか、空想上の懷疑とかいう批評のある所以ゆえんである。

田中喜一氏は、そういう現代人の性せつ急かちなる心を見て、極きわめて恐るべき笑い方をした。曰いわく、「あらゆる行為の根底であり、あらゆる思索の方針である智識を有せざる彼等文芸家が、少しでも事を論じようとすると、観察の錯誤と、推理の矛盾と重ちよう疊じよう百ひやくやくしゆつするのであるが、これが原因をたず釋なねると、つまり二つに歸する。その一つは彼等が一時の状態を永久の傾向であると見ることであり、もう一つは局部の側そく相しようを全体の本質と考えることである」

自己を輕蔑する心、足を地から離した心、時代の弱所を共有す

ることを誇りとする心、そういう性急な心をもしも「近代的」というものであつたならば、否、所謂「近代人」はそういう心を持つてゐるものならば、我々は寧ろ退いて、自分がそれ等の人々よりより多く「非近代的」である事を<sup>たの</sup>しみ、かつ誇るべきである。そうして、最も<sup>せつ</sup>性急<sup>かち</sup>ならざる心を以て、出来るだけ早く自己の生活その物を改善し、統一し徹底すべきところの努力に従うべきである。

我々日本人が、最近四十年間の新らしい経験から惹き起されたところの反省は、あらゆる意味に於て、まだ浅い。

もしも又、私が<sup>ここ</sup>此処に指摘したような性急な結論乃至告白を口にし、筆にしなから、一方に於て自分の生活を改善するところの

何等かの努力を営み——たとえ仮令ば、デカダン頹廢的という事を口に讚美しながら、自分の脳神経の不健康をうれ患うて鼻の療治をし、夫婦關係が無意義であると言いなから家庭の事情を緩和すべき或る努力をし、そしてその矛盾に近代人の悲しみ、苦しみ、乃至絶望があるとしている人があるならば、その人の場合に於て「近代的」という事は虚偽である。我々は、そういう人も何時かはその二重の生活を統一し、徹底しようとする要求に出会うものと信じて、どこ何処までも将来の日本人の生活についての信念を力強く把持はじして行くべきであると思う。



# 青空文庫情報

底本：「石川啄木集（上）」新潮文庫、新潮社

1950（昭和25）年5月10日発行

1970（昭和45）年6月15日30刷改版

1991（平成3）年3月5日58刷

入力：鈴木厚司

校正：鈴木厚司

1999年5月16日公開

2005年9月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 性急な思想

石川啄木

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>